

かとう たくせん 加藤 拓川 (1859~1923)



外交官。政治家。松山城下(現、松山市)出身。松山藩の儒学者で、明教館教授を勤めた大原観山の三男として生まれる。本名は恒忠。号の「拓川」は、松山市郊外を流れる「石手川」に由来する。幼くして儒学に親しみ、藩校・明教館に学び、秋山好吉と親交をもつ。甥の正岡子規を生涯にわたり支援した。

フランス留学を経て外務省に入り、外務大臣秘書官、ベルギー公使等を歴任後、明治41(1908)年には、衆議院議員に当選、任期満了後に貴族院議員に勅選された。また、明治42(1909)年には、改進黨系の新聞『大阪新報』の社長や大阪北浜銀行(現、三菱UFJ銀行)の取締役も務めた。

大正11(1922)年、がんに冒された体ではあったが、要請されて第5代松山市長に就任、城山城跡の払い下げを陸軍省から受けて市民に開放する等、リベラルな政策を遂行する一方、伊予

教育義会会長の井上要(伊予鉄道電気会社(現、伊予鉄道株式会社)社長、北予中学校理事)から、松山に高等商業学校(現、松山大学)を設立する提案を受け、北予中学校(現、県立松山北高等学校)の加藤彰廉校長に協力を求めるとともに、友人の新田長次郎に設立資金の支援を依頼した。また、文部省との設置折衝を行う等、学校設立運動の中心的な役割を果たした。

略歴

安政6(1859)年1月22日	大原観山の三男として、松山城下の歩行町に生まれる。
明治3(1870)年	松山藩校の明教館に入学
明治9(1876)年	司法省法学校に入校。原敬、陸羯南が同窓であった。
明治12(1879)年	司法省法学校を退学処分となる。
明治14(1881)年	観山の実家である加藤家の養子となる。
明治16(1883)年	中江兆民の仏学塾に学ぶ。
明治19(1886)年	旧藩主の子息・久松定謨の随員としてフランスに遊学、パリ法科大学などで学ぶ。
明治25(1892)年3月	外務省交際官試補になり、欧州の各国に出張
明治35(1902)年2月	パリ駐在書記官に任ぜられ渡仏、日仏条約改正に奔走
明治39(1906)年6月	特命全権公使としてベルギーに駐在
明治40(1907)年5月	万国赤十字条約改正会議などに全権大使として出席
明治41(1908)年5月	韓国統監・伊藤博文及び外務大臣・林董と対立して外務省を退職
明治45(1912)年5月	郷党の要請で松山市から第10回衆議院議員総選挙に立候補して当選
大正8(1919)年1月	衆議院議員を満期退任後、貴族院議員に勅選
9月	パリ講和会議に西園寺公望大使の随員として出席
大正11(1922)年5月	シベリア派遣臨時大使としてシベリア出兵の処理に当たる。
大正12(1923)年3月26日	郷党の強い要請で松山市長に就任 市長在職時に病気のため65歳で永眠。墓所は松山市拓川町の相向寺。 勲一等旭日大綬章が贈られる。

〈関連図書〉

- ・加藤拓川『拓川集』 拓川会 1930年~1933年
- ・愛媛県百科大事典編集委員会『愛媛県百科大事典』 愛媛新聞社 1985年
- ・愛媛県史編さん委員会『愛媛県史 人物』 愛媛県 1989年
- ・島津豊幸『加藤拓川伝』 松山大学 1997年

〈主な収蔵資料〉…(P202, 37~38)

〈ゆかりのある場所〉…(P276, 52)

〈関連施設〉…松山市立子規記念博物館

〒790-0857 愛媛県松山市道後公園1-30 TEL:089-931-5566

温山会館

〒790-0826 愛媛県松山市文京町4-2 松山大学内 TEL:089-926-7141